

大乘寺蔵「五山十刹図」考

清水邦彦*

問題提起

石川県金沢市・大乘寺蔵「五山十刹図」は、主に宋代の五山の伽藍配置や僧の席位等を記したものである。仏教史・寺院史・建築史のみならず、生活史から見ても貴重な資料である。(材満やえ子・鍵和田孜・大江長次郎1997・岡田哲2002: pp.50-51)にもかかわらず、一般にはほとんど知られていない。また、大乘寺本は「五山十刹図」と呼ばれているが、他の所蔵場所では「大宋諸山図」・「支那諸刹図」等と呼ばれ、その名称は一定していない。日本への将来者も道元・円爾・義介等諸説ある。

本稿は、大乘寺本と東福寺本との比較を中心に、「五山十刹図」に関する諸問題の整理を試みるものである。

1. 大乘寺本

長年、大乘寺に所蔵されてきたものであり、現在は石川県立美術館で保管されている。上・下全2巻より成る。1943年に古径荘より、また1994年には教行社より複製本が出版されているが、両書とも一般にはなかなか閲覧しがたい。古径荘版は200部発行され、管見の及ぶ限り、現在は駒澤大学図書館及び瑞竜寺(富山県高岡市)¹⁾に所蔵されることが確認される。但し、駒澤大学図書館が所蔵していることは、なぜかしら

※金沢大学国際学類准教授

Webcat検索には引っかけからない。かなり小さく縮刷されているが、『禅学大辞典 別巻』(pp.10-32)及び『仏具大事典』(pp.638-651)にも白黒写真版が掲載されている。2008年になって、徹通義介禅師700回御遠忌記念事業の一環として、東隆眞編『大乘寺開山徹通義介禅師関係資料集』(春秋社)が発刊され、これに『五山十刹図』が収録されている(カラー写真)。古径荘版及び教行社版が忠実な複製(巻物)であるに対し、こちらは冊子形式なので、取り扱いはこちらの方が簡単である。

話を大乘寺本そのものに戻す。大乘寺本は、大乘寺開山・義介(1219-1309)が将来したものと伝わるが、現存本は、室町中期の写本とされている(伊藤忠太1968: p.534)。また、現存本下巻末尾には、「昭和三十七年三月^マ日 依文化財保護法修理了」とある。(当然のことだが、この文言は古径荘版には無い。)

本論文の論考には一般読者の便宜を考え、『大乘寺開山徹通義介禅師関係資料集』(以下、『資料集』と略)を使用する。

2. 東福寺本

東福寺に所蔵されてきたものであり、東福寺開山・円爾(1202-1280)が将来したものと伝わる。東福寺では「大宋諸山図」と呼ばれてきた。京都国立博物館『禅の美術』

1983：pp.193-199に大分縮刷されてはいるが、写真版が掲載されている。

上・下全2巻から成る。上巻は室町中期頃の書写と考えられている（横山秀哉1952a：p.34）。下巻は奥書に「享保十四 緝巳 酉季秋十七日 住山師諱 捨焉」とあるので、江戸中期の書写とされる。また、下巻は大乗寺本系統から模写したとされる（横山秀哉1952a：p.29）。これは私も同意する。下巻中頃にある「徑山万寿寺の楞嚴会」（『資料集』p.58上段）における欠落箇所を考察する。大乗寺本を見ると、同箇所は、何らかの事故における汚損によって、一列分の字が消え、「徑山」の左半分も消えている。これに対し、東福寺本は、意図的に字を欠落させている（『禅の美術』p.197第4段）ⁱⁱⁱ。とすると、東福寺本下巻は大乗寺本（それも現存本）を基にしたとすべきであろう。

3. 永平寺本

永平寺に「支那諸刹図」として伝わってきた。現在は3巻本だが、かつては1巻本、さらにそれ以前は2巻本であった（横山秀哉1952a：p.30）。永光寺第476世吞良（?-1651）の書写と伝わる。書写年代は吞良が永光寺住持であった寛永年間（1624-44）頃と考えられる。『永平寺史料全書 禅籍編 第2巻』に掲載された写真版を見ると巻首識語に「・・・本書大乗寺有之・・・」（p.80上段、以下『史料全書』と略）とあるので、大乗寺本からの書写と考えられる（同書解説p.113下段）。但し、後述するように、永平寺本と現存・大乗寺本とは大きな相違が見られる。また永平寺本では道元が将来したとされている。（「当山開闢大禅仏御真筆写也」

『史料全書』p.80上段）

4. 常高寺旧蔵本

常高寺^{iv}（福井県小浜市）に「大唐五山諸堂図」として伝わってきたが、現在は個人蔵^v。常高寺所蔵時に横山秀哉が調査を行っている。同図を収めた箱の蓋裏にある記述によると江戸時代中期の模写である（横山秀哉1967：p.51）。永平寺本と同系ながら、大乗寺本を照合した跡が見られる（横山秀哉1967：p.51）。なお、これのみ彩色画である^{vi}。（他本は白描^{vii}）

5. 龍華院本

龍華院（京都市右京区）に「禅藍図」として伝わってきた。現存する大乗寺本より無著道忠（1653-1745）が書写^{viii}。無著道忠は『禅林象器箋』の著者である^{ix}。柳田聖山編『勅修百丈清規左・右・附余録』（1977 中文出版社・禅学叢書八）に活字化されている。

なお、この他、数本が存在する^xが、いずれも上述本からの書写なので本稿では論究を省略する。

6. 大乗寺本と東福寺本との比較

上巻に関し、大乗寺本と東福寺本はほぼ同一であり、両本は同一の原本を基にしているという説もある（関口欣也1983：p.138）。しかし、微妙な相違が何カ所が見られ、作業仮説として、以下の4説が提示できる。

①両本は異なる原本からそれぞれ筆写された（横山秀哉1967：p.49）

②原本は同一だが、両本それぞれの筆写過程で欠落等が生じた（関口欣也1983：p.138）

③東福寺本→大乘寺本（石井修道1982：p.19）

④大乘寺本→東福寺本（大谷哲夫2006：p.172）

4 説を念頭に置いた上で、以下、両本の相違の分析を行いたい。まず大きな相違3箇所を指摘する。大乘寺本上巻中頃にある「須弥壇の図^{xii}」（『資料集』p.50下段）が東福寺本には存在しない。同じく大乘寺本上巻最後にある「欄干柱」・「香台」（『資料集』p.52下段）が東福寺本には存在しない。とすると、該当箇所は東福寺本の筆写過程で欠落したものであり、即ち④大乘寺本→東福寺本、なのだろうか？

しかし、事態はそう単純ではない。というのも、横山秀哉によると、この3図のみ筆蹟が異なるとされる（横山秀哉1967：p.47）。確かにこの3図に於いて本来まっすぐであろう線が歪んでいる。現代的に云えば、他の多くの図は定規で書いたか如くの直線だが、当該の3図の線はフリーハンドで書かれているが如くである。但し、字体の筆蹟は同一人物と考えられる。敢えて推測が許されれば、この3図のみ「何らかの事情で」「急いで」書かれたと考えられる。

大乘寺本『五山十刹図』は現在、巻物だが、紙の継ぎ目を見ると、「須弥壇」及び「欄干柱」・「香台」で本来、紙一枚ずつであったと考えられる^{xiii}。即ち、現存本制作過程で、この2枚・3図が増補された可能性がある。或いは、3図が一旦紛失し、新たに作画されたか。但し、この3図が東福寺

本には存在しないのは単なる偶然であろうか？なお大乘寺本を基とし、元禄年間に作成された龍華院本にもこの3図は存在し、筆蹟は他の箇所と同一で、線も直線である。（永平寺本に関しては後述）

そこでもう少し、両本の相違箇所の分析を続けたい。この相違を除けば、大乘寺本の欠落が目立つ。例えば、「天童山景德寺の伽藍配置」（『資料集』p.46上段^{xiii}）・「靈隠寺伽藍配置」（『資料集』p.47上段）・「天台万年山の伽藍配置」（『資料集』p.46上段）・「径山万寿寺の法座」（『資料集』p.46下段）・「靈隠寺の椅子」（『資料集』p.48上段）・「径山万寿寺の衆寮の聖僧宮殿」（『資料集』p.48下段）・「卓^{xiv}」（『資料集』p.49下段）・「径山万寿寺の方丈の椅子の図」（『資料集』p.48下段^{xv}）・「方丈^{xvi}」（『資料集』p.50上段）に1～5字程度の欠落が見られる。また「靈隠寺椅子」（『資料集』p.48上段・p.49上段）では装飾が一部省略されている。

だからといって、必ずしも東福寺本が良本という訳ではない。「径山万寿寺の僧堂の聖僧宮殿」には東福寺本に5字の欠落がある（「廣一尺六寸」『禅の美術』p.194第4段）。「靈隠寺伽藍配置」にも2字欠落がある（「香香」『禅の美術』p.194第1段）。

大乘寺本と東福寺本との比較から何が云えるか？現存本からは両本の関係について不明としか云いようがない。

ただ、一つだけ私説を提示したい。それは、冒頭の「今上天皇万歳牌・南方火徳真君牌」の図である。これは本来、「今上天皇万歳牌・南方火徳真君牌・檀那本命元辰牌」の三牌であるべきものである。しかしなが

ら、大乘寺本・東福寺本とも「檀那本命元辰牌」を欠いている。「檀那本命元辰牌」は永平寺本には存在する（『史料全書』p.80上段）。また、本来は「南方火徳真君」ではなく、「南方火徳星君」^{xvii}であるべきだが、両本とも「真」となっている。（永平寺本でも「真」である。）ここから大乘寺本と東福寺本とが同一の原本から筆写されたという説が出されたのであろう。しかし、横山秀哉はこの立場は取らない。大乘寺本は、第一紙の長さが30cmと他の紙（47cm）より短いことから、「檀那本命元辰牌」の箇所が損傷し、装を改めた際、切り取られた。一方、東福寺本は、第一紙の長さは他と同一ながら「檀那本命元辰牌」が書かれていない^{xviii}。そこで横山は大乘寺本と東福寺本とは異なった原本から筆写されたとする（横山秀哉1967：pp.48-49）。

しかし、大乘寺本にある3図が東福寺本に無く、なおかつ東福寺にない3図のみ筆蹟が微妙に異なる。両本とも「檀那本命元辰牌」を欠く。一つの仮説として、以下の図を提示したい。

なお、増補された3図は何の根拠も無かったものではなく、大乘寺に副本のような

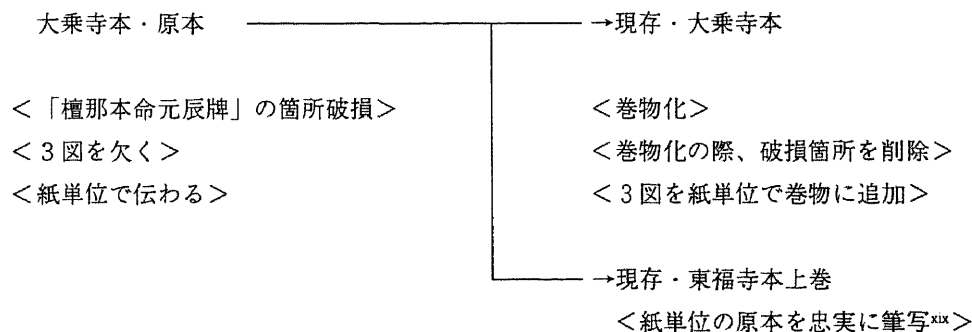
ものがあり、それに由ったと私は考えている。というのも大乘寺本を基としたとされる永平寺本にはこの3図が存在するからである（『史料全書』p.92下段・p.95下段^{xx}）。また、＜紙単位で伝わる＞は、冒頭部分だけを論拠としている訳ではない。『五山十刹図』は同一寺院の事物が飛び飛びで表現されている^{xix}ゆえ、もともと紙単位で断片的に書かれていたと推測されている（田邊泰1931：p.29）。

7. 将来者及び原図作成者

『五山十刹図』の作成者は誰か？また『五山十刹図』を日本に持ち込んだ将来者は誰か？古来、道元説・円爾説・義介説が立てられてきた。

しかしながら、道元説・円爾説は早くに否定される。というのも『五山十刹図』「戒臘牌」（『資料集』p.45上段）に「淳祐七」（＝1247）とあるからである。道元は1227年帰朝、円爾は1241年帰朝であるから、両者とも将来者ではない。

では義介はどうか？義介は懷奘の命を受け、1259年に入宋、1262年に帰朝している。従って、年代的には問題はない。



但し、異論もある。まず問題となるのは、義介に関する一次史料で「五山十刹図」に言及がないことである（横山秀哉1967：p.63）。しかし、『元祖孤雲徹通三大尊行状記』には以下のようにあり、「記録」が五山十刹図を示していると解釈することは充分可能である（東隆真2006：p.236）。

ある時、契公、囑して云はく、「先師が宗旨の建立は公に憑る。諸方の叢林・宋朝の風俗、なかなずく先師が道を伝えし天童山の規矩及び大刹叢林の規矩、記録し来りて当山の叢席を一興すべし。・・・諸方に遍参し、大国に歴観し、以て永平寺の宗旨を建立すべし」と。（原漢文^{xxii}・『曹洞宗全書 史伝上』p.17下段）

なお、義介が寺規作成のために入宋した点は、原図作成者の問題とも関わる（後述）。

先行研究で解釈が分かれるのは、天童山の問題である。天童山は1256年に火災にあって、前述の如く、義介が入宋したのは1259年、帰朝が1262年であるから、その頃、天童山が復旧していたとは考えにくい。ゆえに「天童山景德寺伽藍配置図」を含む『五山十刹図』を義介が作成するのは無理という考え方である。（横山秀哉1967：pp.65-66）

また、義介が最新鋭の図を収録しているのならば、一番新しい年が「淳祐七」（＝1247）なのは年数が離れすぎている、という説もある（石井修道1982：p.17）。

そこで石井修道は、五山十刹図にしばしば登場する径山から将来者の問題を考察する。『五山十刹図』成立の下限は先に挙げた「淳祐七」（＝1247）であるが、当時、径山の

住持は、無準師範（1178-1249）であり、円爾の師匠である。

そこから、石井は原図作成者を円爾に近い僧とし、また、まず東福寺に将来され、大乘寺本は東福寺での再写とする（石井1982：p.19）。石井論考は、一旦否定された円爾将来説を円爾に近い僧とすることで復活させたものと言える。なお、東福寺の伽藍配置は、『五山十刹図』と類似した点があるという^{xxiii}（太田博太郎1951：p.135）。

しかし、石井論考も決定打ではない。まず、年代の問題を今一度考える。確かに『五山十刹図』に記載される天童山は義介入宋時には焼失していた可能性が高い。しかし、焼失前の天童山の図が残っていて、それを義介が書写していた可能性も残る（佐藤秀孝2006：p.171）。『五山十刹図』自体、元以前の南宋の様子を写している傾向がある（伊藤忠太1968：p.535^{xxiv}）。義介入宋時に、天童山が焼失していたことは原図作成者の問題の決定打とならないのである。

次に径山の問題を考察する。確かに『五山十刹図』には径山がしばしば登場し、当時の住持は円爾の師匠、無準であった。しかし、義介は所謂曹洞宗寺院のみを来訪していた訳ではない。日本に於いては、東福寺・建長寺等臨済宗寺院を訪れている。従って、義介が径山を来訪していても不思議ではなく^{xxv}、『五山十刹図』を義介が作成した可能性は残る。

なお、田邊泰は、義介が寺規の研究のため入宋した点を重視し、原図作成者・将来者を義介とする（田邊泰1931：p.28）。当時、寺規の研究に入宋したのは義介に限らないが、今一度注目すべき視点である。という

のは、『五山十刹図』は伽藍配置等を記した建築資料であると同時に寺規を記した資料でもあるからである^{xxvi}。

少なくとも原図作成者は日本人と考えるべきである^{xxvii}。というのも「楞嚴会之図」に於いて人名に「日本」という註記がなされている（『資料集』p.58上段）。一方、それ以外の註記（例えば他の国名・民族名）は管見の及ぶ限り見あたらないからである。原図作成者の可能性として、義介も「円爾に近い僧」もありうる。将来者に関しても同様である。

なお、原図作成に当たって大工等技術者が関与していたとする説も唱えられている（田中淡2001：p.98）。『五山十刹図』は精巧な図面であるゆえ、技術者の関与は充分ありうるであろう。しかし確認すべきは、日本中世に於いて、僧は技術者を指導し、事業を行っていたことである。（菊池勇次郎1968・中野豊任1968・井上鋭夫1981・伊藤正敏2000：pp.29-30・さらに云えば僧と技術者とは全くの「別職業」ではなかった。僧の基礎教養として、技術知識が必要であった。伊藤正敏2000：pp.21-23・井原今朝男2004：p.139）例えば、慈善事業で有名な忍性（1217-1303）も技術者との関わりが想定されている（望月友善1978：pp.27-28・三浦圭一1978）。曹洞宗を例に挙げれば、寒巖義尹（1217-1300）や通幻寂霊（1322-1391）は橋を架けたとされるが、これらは僧が技術者を指導し行われたものであろう。また源翁（1329-1396?）は、那須で殺生石を打ち、これをきっかけに石を割る道具は「玄翁」と呼ばれるようになったが、このことは源翁と技術者との密接な関係を示している（石川

力山1982）。『五山十刹図』に関しても同様で、技術者の関与はあり得ると思うが、少なくとも学識のある僧の指導があったものと推定される^{xxviii}。

8. 題名

本稿では仮に『五山十刹図』という名称を使ってきたが、所蔵場所により様々な名称で呼ばれてきた。これは、原図に名称が記載されていなかったからと考えられる。即ち、もともと名前は無かったのである。そのため、各所蔵場所の通称が多数生まれたのである。

『五山十刹図』という名称は不適当とする説もある。この説は『五山十刹図』は十刹を網羅してはおらず、また五山・十刹には含まれない寺も記していることに由る。しかし、①古来より大乘寺では『五山十刹図』と呼ばれてきた、②五山・十刹の伽藍を中心に記している、という2点を考慮するに、今更名称を変えるのも不適当であろう^{xxix}。但し、名称が一定しないゆえ、論文検索等で不都合が生ずるのも事実である。

結びとして

以上、本稿では、『五山十刹図』を巡る先行諸説の整理を試みた。現存するテキストからは不明な点も多く、推測に推測を重ねた箇所もあったが、本稿をきっかけに、『五山十刹図』の研究が進めば、本稿の意義はあるかと思う。

なお本稿作成に当たり、貴重資料の閲覧をお許しくださった大乘寺・石川県立美術館・駒澤大学図書館に深く感謝する。また、平成17年度～21年度文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形

成」事務局より資料の提供を受けた。深く感謝する次第である。田村航先生（小山高専講師）には資料閲覧に同行していただき、その後も資料解釈に助言をいただいた。

＊本稿は科学研究費補助金・基盤研究Cの研究成果の一部である。

註

i 道元禅師讃仰会『道元』第10巻第3号（1943年3月号）裏面表紙広告による。なお、価格は70円。

ii 斉藤善夫2003：p.5

iii ちなみに永平寺本には当該箇所欠落はない。『史料全書』p.104上段

iv 常高寺は、臨済宗妙心派で、お初（お市の次女）の菩提寺。近年はNHK朝の連ドラ「ちりとてちん」のロケに使われた。

v 横山秀哉1952：p.32には「伊東忠太氏蔵」とある。日本建築学会に於いて伊東忠太資料整備小委員会が立ち上がっているようなので、今後の公開に期待したい。

vi 田邊泰1931：pp.37-41に掲載される某氏所蔵本（白黒写真版）は常高寺旧蔵本である（横山秀哉 1952a：p.32）。残念ながら一部のみの掲載。

vii この点に関し、伊東忠太はもともと彩色があったとする（伊東忠太1968：p.533）。しかし、常高寺旧蔵本の成立年代と他本の成立年代とを考えると、もともと彩色があったと断定するのは難しい。

viii 現存・大乘寺本より筆写した証拠として、東福寺本の箇所と言及した「径山万寿寺の楞嚴会の図」の破損箇所が挙げられる。龍華院本では破損箇所を忠実に空白扱いとした上で、「此処本紙破」とある（『勅

修百丈清規左鑑・庸峭余録』p.1320）。

ix 詳しくは柳田聖山1977参照。

x 横山秀哉1952a：pp.31-34

xi 「径山万寿寺の雲版の図」と「径山万寿寺の団扇の図」との間にあることから見ると、径山万寿寺の仏殿の須弥壇の図と考えられる。なお、同様の須弥壇が建長寺に現存する（東京国立博物館2003：p.180）。形態は『五山十刹図』とほぼ同じだが、模様は異なる。

xii 紙の継ぎ目が明確なのは当該箇所のみならず、他の箇所でもはっきりとしている。なお、念のため、古径荘版を確認したが、このことは同様であり、1962年の修理によるものではない。

xiii 右上に於いて「経蔵」の2字が欠落。また、左下に於いて大乘寺本では「頤堂東頭 前資」とあるが、東福寺本では「浄頭」とのみある。これだけだと判断が付きかねるが、近接箇所に両本一致して「頤堂 前資」とあるので、大乘寺本の重複か？なお、当該箇所は「東司」の近接箇所なので、東福寺本「浄頭」（東司の清掃をする役）の方が解釈はしやすい。永平寺本に於いて当該箇所は「東頭 前資」（『資料集』p.83下段）とある。

xiv 「径山万寿寺の僧堂の倚子の図」と「径山万寿寺の方丈の倚子の図」との間にあるので、やはり径山万寿寺の卓か？

xv 但し、この欠落は破損によるもの。

xvi 東隆眞2006：p.304は径山万寿寺の方丈ではないか、としている。

xvii 例えば、『瑩山清規』にも「南方火徳星君」とある（『瑩山禅』第6巻p.117）。

xviii 『禅の美術』p.193第1段を見る限り、

東福寺本第一紙には、「今上皇帝萬歳」「南方火徳真君」の二牌の右側に「戒臘牌」の右側が記載されている。戒臘牌は第二紙にも跨っている。(大乘寺本の戒臘牌は第二紙のみに記されている。)

xix但し、註18で言及したように東福寺本上巻第一紙は、基となった本の「檀那本命元辰牌」の部分が破損していた(もしくは空白であった)ため、その箇所を詰めて、「戒臘牌」の右側を記した可能性がある。

xx気になる筆蹟であるが、永平寺本の当該図は、大乘寺本ほど「乱れ」はない。しかし、若干、直線に乱れが認められ、「須弥壇」の図の右側が大乘寺本同様消えている。おそらく現存・大乘寺本と同一の原本を基にしていたと考えられる。

xxi例えば天童山景德寺に関しては、『資料集』p.46上段に「伽藍配置」があり、かなり飛んで『資料集』p.51下段に「山門扉の図」・「窓の図」があり、さらに飛んで『資料集』p.57上段に「宣明(浴室)の図」がある。他の寺院も同様である。

xxii書き下しは佐藤秀孝2006: pp.134-135に依った。

xxiii但し、太田は、東福寺の伽藍は純粹に唐様ではなく、日本的要素もあるとする(太田1951: p.135)。

xxiv但し、元以降の地名も存する(伊東忠太1968: p.537)。

xxv佐藤秀孝2006:p.158は義介が径山に赴き、当時の住持・広聞に会う理由があった、としている。

xxvi横山秀哉1952b: p.39

xxvii斉藤義夫2003: p.5は、「何山寺鐘の図」

(『資料集』p.57下段)の分析から同図に関し「中国在来の絵図を底本にしたものではなく、目的意識を持って渡宋した日本人が自ら調査し、みずからの手で描いたであろう」と述べている。

xxviii例えば、識字の点を考慮すべきであろう。あるいは、学識を有する僧でなくては禅文化を詳細に記述することはできない(横山秀哉1967: p.62)。

xxix無論、大乘寺以外の所蔵場所で伝えられてきた名称を否定する訳ではない。

参考文献

- 東隆眞2006「大乘寺本『五山十刹図』」(同編『徹通義介禅師研究』大法輪閣) pp.223-340
石井修道1982「中国の五山十刹制度について」(『印度学仏教学研究』第31巻第1号) pp.15-19
石川力山1982「中世曹洞宗の地方展開と源翁心昭」(『印度学仏教学研究』第31巻第1号) pp.227-231
伊藤忠太1968「五山十刹図に就いて」(『東洋建築の研究 上巻』龍吟社) pp.533-546
伊藤正敏2000『日本の中世寺院』吉川弘文館
井上鋭夫1981「中世鉾業と太子信仰」(『山の民・川の民』平凡社) pp.102-141
井原今朝男2004『中世寺院と民衆』臨川書店
太田博太郎1951「禅宗建築はいつ伝来したか」(『日本建築学会論文集』第42号) pp.128-139
大谷哲夫2006「徹通義介禅師周辺をめぐって」(東隆眞編『徹通義介禅師研究』前掲) pp.33-53
岡田哲2002『ラーメンの誕生』ちくま新書

- 菊池勇次郎1968「中世奥山庄の真言修験」
 (『新潟史学』第1号) pp.12-21
- 齊藤義夫2003『支那禅刹図式』の中の何山
 寺鐘」(齊藤義夫・大熊恒靖『加賀大乘寺
 蔵『支那禅刹図式』と摂津仏眼寺鐘』)
 pp.1-5*『史迹と美術』第735号 2003掲載
 の同名論文の再録)
- 材満やえ子・鍵和田孜・大江長次郎1997「中
 国古典家具の研究・1；五山十刹図に示
 された宋代家具の歴史的意義について」
 (『デザイン学研究』第44号)p.39
- 佐藤秀孝 2006 「徹通義介の入宋と禅林視
 察について」(東隆眞編『徹通義介禅師研
 究』)前掲pp.131-184
- 白石虎月1939「『大宋諸山図』に就いて」
 (『歴史地理』第74巻第4号) pp.28-40
- 関口欣也1983「中世五山伽藍の源流と展開」
 (『五山と禅院』小学館) pp. 124-169
- 田中淡2001「中国建築の知識は如何なる媒体
 を通じて日本に伝えられたか」(東野治
 之・他『考古学の学際的研究』昭和堂)
 pp.85-114
- 田邊泰1931「大唐五山諸堂図に就て」(『早稲
 田建築学報』第8号) pp.24-41
- 東京国立博物館2003『鎌倉 禅の源流』日本
 経済新聞社
- 中野豈任1968「白河庄の中世鉦業と修験」
 (『新潟史学』第1号) pp.70-81
- 三浦圭一1978「鎌倉時代における開発と勤
 進」『日本史研究』第195号 pp.1-30
- 望月友善1978「中世の石大工」『日本の石仏』
 第8号 pp.21-53
- 柳田聖山 1977「無著道忠の学問」(同編
 『勅修百丈清規左・庸峭余録』中文出版
 社) pp.1335-1376
- 横山秀哉1952a「支那禅刹図式の研究(1)」『東
 北大学建築学報』第1号 pp.28-41
- 横山秀哉1952b「支那禅刹図式の研究(2)」『東
 北大学建築学報』第2号 pp.36-53
- 横山秀哉1967『禅の建築』彰国社